

# 教職課程科目における授業方法にかんする実践研究

Practical Research on the Method of Teaching in a Teachers-Training Course

青 山 佳 代

Kayo AOYAMA

はじめに：一般大学で教職課程科目を担当するということ

現在、わが国の教員養成は(1)「教員養成は大学で行うこと」、(2)「教員養成の開放制」という2つの原則に基づいて行われている。この原則に基づき、各大学は教職課程を設置し、教員免許資格授与している。

国立大学の教員養成を行う学部（多くは「教育学部」）では、学生の大多数が教育学と直接的に関係のある分野を専攻している。一方、一般大学の教職課程を履修している学生の多くは、教育学とは直接的には関係のない分野を専攻している。加えて、さまざまな学部から、さまざまな学年の学生が履修しているし、履修者の数も多く、大人数講義（100名程度）になることが少なくない。したがって、一般大学における教職課程カリキュラムにおいては、各学部の専門科目以上に、授業方法において工夫が必要であることはいうまでもない。

このような視角から、本稿では、教職課程科目における教育方法について、筆者が金城学院大学で担当している授業における試みを検討し、今後の課題を明らかにしたい。

1. 教授法に関する研究成果を積極的に活用する

筆者は、一般大学において教職課程の授業を行う際に、これまでの大学における教授法に関する研究成果を積極的に活用することを心がけた。

その際、有益だったのが、名古屋大学高等教育研究センターが開発した『ティップス先生からの7つの提案<sup>1)</sup>』の活用であった。米国のアスティン（Astin）という教育学者は、"Students learn more when they are involved（学生は参加するときによく学ぶ）"と提唱している。学生が「授業に参加している！」という意識を高めることが、学習効果を高めるコツといえる。このアスティンの提唱を基礎として、名古屋大学高等教育研究センターは、学生が授業での参加度を高めるための指針と方法を示した『ティップス先生からの7つの提案（教員編）』（以下『7提案』と記す。）を開発した。この『7提案』は、同大学に埋もれていた教育実践を、学内で広く共有させるために作られ、現在、冊子版とウェブ版で公開されている。

筆者は、この7つの提案の内容は名古屋大

学だけに留まらず、様々な大学において適応可能と仮定し、同大以外の授業においても活用している。

表1. ティップス先生からの7つの提案 教員編

1. 学生と教員が接する機会を増やす
2. 学生間で協力して学習させる
3. 学生を主体的に学習させる
4. 学習の進み具合をふりかえらせる
5. 学習に要する時間を大切にする
6. 学生に高い期待を寄せる
7. 学生の多様性を尊重する。

冊子のなかでは、名古屋大学の教員が実践しているノウハウが表1のように、7つに分類されている。それぞれの提案は、学生の学習を高めるうえで、重要な要素とされている。

さらに、『7提案』では、具体的な方法をまとめ、教員の忙しい毎日のなかで、どのようにしてそれを実現できるか、といったノウハウを掲載している。

それが以下の資料①という表に示されている。

### 〈資料①〉『ティップス先生からの7つの提案 教員編<sup>2)</sup>』

#### 提案1 学生と接する機会を増やす

- ・クラスの学生に出会ったら声をかける (1-1)
- ・学生にオフィスアワーを積極的に利用するようにすすめる (1-2)
- 学生に自分のメールアドレスを公開し、eメールによる質問を受けつける (1-3)
- 授業終了後しばらく教室に残り、学生の質問に答える (1-4)
- 自分の研究内容について話す (1-5)
- ・学生が教員に親しむための親睦会を開く (1-6)
- ・学生が主催する勉強会やイベントに参加する (1-7)

#### 提案2 学生間で協力して学習させる

- ・学生同士で協力して学ぶことの重要性を伝える (2-1)
- 初回の授業では学生がお互いに知り合える活動を取り入れる (2-2)
- ・授業時間の内外において共同で行う課題を出す (2-3)
- 少人数のグループに分けてディスカッションを行う (2-4)
- ・学生のグループで利用できるメーリングリストや電子掲示板を設定する (2-5)
- 学生が提出したレポートや答案の内容を受講生全体で共有する (2-6)
- ・学生間でそれぞれの課題を評価し合う活動を取り入れる (2-7)

#### 提案3 学生を主体的に学習させる

- ・主体的に授業に参加することの重要性を伝える (3-1)
- ・授業ではすべての学生に発言・質問する機会を与える (3-2)
- ・授業の中で学生の課題を発表させる (3-3)
- ・学んだことを他の学生に教える活動を取り入れる (3-4)
- ・学生が個別に教育活動をする機会を設ける (3-5)
- 授業をよりよくするための学生の提案・アイデアを歓迎する (3-6)
- ・授業内容に関連する研究会やインターンシップなどを紹介する (3-7)

#### 提案4 学習の進み具合をふりかえらせる

- 授業の内容が理解できないときは教員に伝えるようにすすめる（4-1）
- ・小テストや宿題を課すことで学生の進捗状況を常に活用する（4-2）
- ・良かった点を褒め、同時に建設的なコメントを与える（4-3）
- 出席票に質問や意見を書かせ、次の授業で回答する（4-4）
- ・試験の答案やレポートを一週間以内に返却する（4-5）
- ・テスト終了直後に解答例を学生に配布する（4-6）
- ・学期中に1回以上、個々の学習成果に対して詳細なコメントを与える（4-7）

#### 提案5 学習に要する時間を大切にする

- ・日常的な学習や学習計画の重要性を伝える（5-1）
- 授業は時間通りに始め、時間通りに終了する（5-2）
- ・授業の予習・復習や課題に取り組むために必要な学習時間量を伝える（5-3）
- ・授業には毎回出席して、学習に集中するように求める（5-4）
- ・大きな課題の場合には、段階的な締切をいくつか設定する（5-5）
- ・学生に発表させる時は、事前にリハーサルをするように求める（5-6）
- ・重要な文献は教材集などの形で早い時期に学生に渡しておく（5-7）

#### 提案6 学生に高い期待を寄せる

- ・学習する内容が学生の将来において持つ意味を考えさせる（6-1）
- 毎回の授業の始めにその日の学習目標を板書し、口頭でも説明する（6-2）
- ・がんばって取り組まなければ達成できない課題を用意する（6-3）
- ・意欲的な学生向けに発展的内容の文献や課題を用意する（6-4）
- ・大学院の授業を見学する機会を与える（6-5）
- ・授業内容の延長線上にある最先端の研究を紹介する（6-6）
- ・優れた答案やレポートの例を紹介し、どの点が優れているのか説明する（6-7）

#### 提案7 学生の多様性を尊重する

- ・自分と異なる考え方や背景を尊重することの重要性を学生に伝える（7-1）
- ・学生間の経験、興味・関心、学習スタイルの違いについて知る努力をする（7-2）
- ・予備知識が足りない学生のために補助教材を用意する（7-3）
- ・障害をもった学生のために補助器具や教授法の工夫などの便宜をはかる（7-4）
- 映像教材、ディスカッション、グループ学習などの多様な学習活動を用意する（7-5）
- ・他の学生に対する差別的発言や攻撃的な言動をしないように求める（7-6）
- ・教員自身が持つバイアスやステレオタイプに敏感になる（7-7）

表内の○印を付した部分が、実際に筆者が授業で積極的に取り入れた部分である。これらについては後の節で詳しく説明したい。

## 2. 「教育史」講義概要

筆者は、2008年度より金城学院大学で「教育史」を担当している（前期・後期1コマずつの計2コマ）。2008年度前期の「教育史」の授業の概要は以下の通りある。なお、受講

生は81名で（受講生の学部構成は、文学部23名、生活環境学部21名、現代文化学部16名、人間科学部20名、薬学部1名である。また、学年構成は1年生49名、2年生27名、3年生4名、4年生1名である。）あった。

### 〈資料②〉（金城学院大学 2008年度前期「教育史」授業概要）

#### 授業の目的およびねらい

日本の教育は、制度的にも思想的にも西洋の栄養を受けながら発展してきました。この授業では、受講生のみなさんとともに、これまでのみなさんの教育体験も鑑みながら、西洋の教育の歴史を中心に学んでいきます。

#### 授業の概要

この授業が終わったときに、受講生のみなさんが以下の3つの能力を身につけることを目標にします。

1. 教育の歴史の興味をもち、「教育史」に関する知識を深める。
2. これまでみなさんが経験してきた事象が、教育に関する研究成果とどのような関連があるかを、歴史的事実として理解できるようになる。
3. 現在の教育問題に対して、自分なりの考え方を論理的に説明できるようになる。

#### 授業計画

- 第1回 オリエンテーション：担当教員の紹介、この授業に関する説明、シラバスの活用方法
- 第2回 「学校」とは？：みなさんがこれまでうけてきた授業は？－ディスカッションの方法を学ぶ
- 第3回 古代・中世の教育
- 第4回 中世の教育（1）：学校教育と子育て （※〔課題1〕の出題）
- 第5回 中世の教育（2）：大学の発生
- 第6回 近世の教育：ルネサンス期の教育思想
- 第7回 近代の教育（1）：実学主義の教育思想
- 第8回 近代の教育（2）：ルソーとペスタロッチとフレーベル
- 第9回 近代の教育（3）：産業革命と児童労働
- 第10回 近代の教育（4）：近代公教育制度の成立
- 第11回 女子教育の発達
- 第12回 現代の教育（1）：20世紀の子ども観と教育改革
- 第13回 現代の教育（2）：現代の教育課題について
- 第14回 将来の教育者として：これまでの授業のまとめ
- 第15回 定期試験

講義内容を概括すれば、次のようである。第一の特色はオリエンテーションである。第1回目の講義が該当する。担当教員の紹介、この授業に関する説明、シラバスの活用方法を説明する。シラバスの説明では、授業概要に沿って、「授業の目的およびねらい」、「授業の概要」、そして「授業計画」を受講生に伝える。この手続きを通して、受講生はこれから授業で何が語られ、何を学ぶことができるかを知ることができる。また、シラバスには、「参考図書」、「役に立つサイト」、「担当教員への連絡方法」、「担当教員からのメッセージ」、「成績評価」そして「クラス内のルール」が掲載されている。本授業のシラバスは、A4判4ページで構成されている。シラバスとは、教員と受講生との一種の契約をみなせる。なので、教員と受講生の双方がコースの展開に責任をもつ意識が高まるといわれる。受講生にとっては、自分がコースのどこにいて、どこに向かっているのかを知ることができる。また受講生にとっては、シラバスを作成する作業を通して、授業計画をより具体的にうることができる（池田ら2001：59）。

第二の特色は、ディスカッションを取り入れた点である。これは第2回目と第13回目の授業に該当する。初回のディスカッションでは、ディスカッションの方法を学ぶと題して、ディスカッションの方法にはさまざまな種類があることを受講生に説明したうえで、ディスカッションに入ってもらった。第13回目の授業でのディスカッションでは、現在の教育課題についてディスカッションをしてもらった。両方の回とも、ディスカッションを行う際には、これまでに一度も話したことがない受講生どうしがグループになれるような工夫をした。たとえば、誕生月別や、学生番号の下一桁別といったグループ分けを行った。

第三の特色は、「レポートの書き方」を学

ぶために課題を課した点である。この授業の受講生は一年生が多かったため、レポートの書き方を全く知らない者が少なくなかった。そこで、1回分の授業の約半分を活用して、レポートの書き方を説明した。

以上の3つの特色を活用することによって、本授業の目標である、1. 教育の歴史の興味をもち、「教育史」に関する知識を深める。2. これまでみなさんが経験してきた事象が、教育に関する研究成果とどのような関連があるかを、歴史的事実として理解できるようになる。3. 現在の教育問題に対して、自分なりの考え方を論理的に説明できるようになる。に到達できるようにした。

なお、本授業の成績評価は、授業への参加度（出席点＋ディスカッション＋リアクションペーパー）が25%、課題1（レポート）が35%、定期試験が40%という割合で算出することとした。

### 3. 授業方法の工夫：「ティップス先生からの7つの提案」に学ぶ

前節でもこの授業に関する特色を述べてきたが、以下に示す諸項目が筆者が、授業を実施する上で特に工夫した項目である。

#### 3.1 自分が何者であるかを語る

筆者は授業の最初に「自分が何者であるか」と語るようにしている。

初回の授業は前節でも述べたように、担当教員の紹介、この授業に関する説明、シラバスの活用方法を説明している。そのなかで、「ティップス先生からの7つの提案」にある、以下の項目と取り入れた授業展開を行った。

○学生に自分のメールアドレスを公開し、eメールによる質問を受けつける（1-3）

## ○自分の研究内容について話す(1-5)

シラバスにも、筆者のメールアドレスを記載している。実際、授業期間内に数件の質問を受けつけた。

また、自分の研究内容についても、シラバスに簡単な記述を行ったが、初回の授業ではさらに詳しく自分の研究内容と、授業科目との関連についても説明し、学生に対して「自分は何者であるか」を説明した。このような手続きを経ることによって、学生が担当教員に対してどのように接すればよいかを理解できると思う。

さらに、初回の授業では『7提案』に「○初回の授業では学生がお互いに知り合える活動を取り入れる(2-2)」とあるように、この授業においても、学生がお互いを知り合える活動を取り入れた。教員は、学生がどの学部にも所属している何年生であるかを把握しているが、先にも述べたように、全ての学部からすべての学年の受講生が集まっている本授業では、隣の席の学生が何者であるかも、それぞれの受講生は把握していない。そこで、初回の授業では、学生に「取得しようとしている教職科目」や、「将来希望する職業」、そして「この授業に期待すること」についてA4判1枚に記述してもらい提出してもらった。この回答は次回の授業で、受講生の前で教員は発表した。この手続きを経ることによって、受講生は、自分がこの授業のなかでどのような立場にいるのか、そして、周りの学生がどのような価値観を持っているのかを把握でき、より意欲的に授業に参加することができよう。実際、受講生からも「周りの学生の考え方がわかったよかった」という感想を得ている。

### 3.2 ディスカッションの導入

この授業では、2度ほどディスカッション

を行った。『7提案』にも、以下のような記述がある。

○映像教材、ディスカッション、グループ学習などの多様な学習活動を用意する(7-5)

○少人数のグループに分けてディスカッションを行う(2-4)

前節でも述べたが、この授業には、全学部の全学年の学生のうちの81名が受講している。せっかく多様な受講生が集まっているのに、いつも同じ人とばかりディスカッションしてはもったいない。そこで、この授業のディスカッションでは、現在の教育課題について、これまでに一度も話したことがない受講生どうしがグループになれるような工夫をした。たとえば、誕生月別や、学生番号の下一桁別といったグループ分けを行った。そうすることによって、受講生が今まで学内で一度も会話をしたことのない人と話をできる機会を提供することができた。

### 3.3 リアクションペーパーの積極的活用

最後に、この授業でもっとも効果を発揮したのが、リアクションペーパーの積極的活用である。リアクションペーパーを活用することの意義については、『7提案』にも、以下の項目でみることができる。

○出席票に質問や意見を書かせ、次回の授業で回答する(4-4)



リアクションペーパー（080507）

【氏名】	【学生番号】
【学部・学科】	
【今日の授業の感想】	
【今日の授業のペース】 <input type="checkbox"/> はやかっただ <input type="checkbox"/> ちょうどいい <input type="checkbox"/> 遅かった (チェックを入れてください)	
【今日の授業の内容に関する質問（もしあれば・・・）】	

以上です。

〈資料③〉 授業で活用した「リアクションペーパー」

本授業のリアクションペーパーには、資料③に示すように、(1)「今日の授業の感想」、(2)「今日の授業のペース（はやかっただ、ちょうどいい、遅かったより選択）」、(3)「今日の授業の内容に関する質問」の3項目を受講生が記入することになっている。

この項目を学生に毎回記入してもらうことによって、学生の理解の度合いを測ることができる。(1)の「今日の授業の感想」では、受講生がその日の授業で理解したことを、端的な文章で表現している。この項目を教員が読むことによって、学生がどのようにこの授業に関わっているかを把握することも可能である。また、教員自身が気づかなかった研究視角を提供してくれることもあり、双方にとってかなり有益なことが明らかとなった。

また、(2)「今日の授業のペース（はやかっただ、ちょうどいい、遅かったより選択）」の項目では、教員自身が自分ではわからない授業のペースを学生側にたって把握することができる。教員自身が「今日の授業のペースは

良かった」と思っている、初めて聞くことからの多い受講生にとっては「早すぎてわからなかった」とか「資料の説明が早すぎた」といった意見を寄せられたこともある。教員自身が得意な分野は、やはり駆けて足で説明している傾向もあるようだ。

最後の(3)「今日の授業の内容に関する質問」では、その日の授業のなかで疑問に思ったことを自由に記述できるようにしている。この項目を教員が読むことによって、毎回の授業計画のなかで、何を説明しなければならなかったのかの反省を促すことができるし、学生に対して次の授業において、その質問に回答できる。

リアクションペーパーを活用することによって、〈形成的評価〉を行うことができ、週に1度の15回の授業、それも1回あたり90分の授業において、教員と受講生の双方が互いの思いを理解することにおいてとても有益であると感じた。

また、リアクションペーパーに書き込む3

項目以外にも、リアクションペーパーを活用することによって、思わぬ点を発見できた。それは、『7 提案』でも「○授業をよりよくするための学生の提案・アイディアを歓迎する（3-6）」という記述があるのであるが、まさにその提案やアイディアを受け入れることができたのである。これまで、リアクションペーパーは、授業の最後に受講生に配布していたのであるが、受講生がリアクションペーパーに記した提案によって、「リアクションペーパーを授業の最初に配布する」ようにしたのである。こうすることによって、授業中に気づいたことや、気になったことを、授業中に書き留めておくことができるからであった。

### 3.4 今、自分がどこにいるのか

さらに、この授業では以下の項目についても気をつけるようにした。

○毎回の授業の始めにその日の学習目標を板書し、口頭でも説明する（6-2）

この授業のシラバスには毎回の授業計画があらかじめ記載されているのだが、大学での授業というのは、週に1回それも90分しかない。授業と授業の間が1週間開くのであるから、毎回の授業の始めにその日の学習目標を板書し、口頭でも説明することが重要である。

筆者はパワーポイントを活用して授業を行ってきたが、始めのスライドには、かならず「今日の授業のポイント」を記すように心がけた。そうすることによって、学生が「今日は、何を中心に聞くべきで、どのような点が重要であるか」を認識することができるからである。

また、筆者はこの授業では、ラーニングポータル (<http://cms.kinjo-u.ac.jp/>) も積極的に

に活用した。教育実習や課外活動で授業に出席できなかった学生が、その日の授業を自学自習できるようにした。

以上のように、この授業では『7 提案』を参考にした授業展開を行ってきたわけであるが、この提案が授業を行う上で、効果があることが、今回の実践によって明らかとなった。

### 4. 授業評価－受講者からの感想に基づいて

この授業方法は、受講生に対してどのような印象を与えたのであろうか。全15回の授業の終了後に提出されたレポートに基づいて検討したい。この授業では、(1) リアクションペーパーを活用すること、(2) 授業にディスカッションを取り入れること、この2点についての感想が多く寄せられた。この2点を分析した結果、以下のことが、本授業を進めるうえで、効果的であったことが明らかとなった。

第一に、リアクションペーパーを活用することが、筆者の想像以上に有益であったことである。第二に、グループ学習（ディスカッション）を取り入れることが有効だということである。

第一点目の、リアクションペーパーの活用については、以下のような感想が書かれてあった。

- ・リアクションペーパーの発表が楽しかった。
- ・毎回のリアクションペーパーで授業がふりかえられたし、他の人の意見が聞けてよかった。
- ・リアクションペーパーを毎回書ける。わからないことや疑問に思ったことは、授業中に聞いたりするのがいいと思うけど、実際「まあいいか」となってしまうがちなので、



とてもありがたかった。

- ・リアクションペーパーでは、みんながどう思っているのか知ることができてよかった。
- ・リアクションペーパーは、意見が反映されるのでとてもよかった。
- ・リアクションペーパーで、感想や疑問に思ったことを書くことによって先生に伝えることができた点。
- ・授業ごとに学生の意見を取り入れてくれて良かった。
- ・前回の授業の復習をしてくれるから内容が掴みやすかった。

第2点目のディスカッションの導入に対しては以下のようなコメントがあった。

- ・グループワークも楽しかった。
- ・ディスカッションをやって他学部・多学科の友だちができた。

たしかに、80名もの受講生のリアクションペーパーの全てに目を通すことは容易なことではない。しかし、この手続を経ることによって、学生が何を考えているか、どのあたりでつまづいているのか、理解が深まっているかな等がわかり、教員にとっても非常に有益な方法であることを実感することができた。

### 終わりにー今後の課題

大学は今、国公私立を問わず、さまざまな評価に対応を余儀なくされている。それは教職課程を有するすべての大学・学部・学科・専攻にも関わる課題となってきた。教職大学院や教員免許更新制が具体的な実施課題となってきたことと連動して、学学位段階における教職課程の質的水準の維持・向上も重要なテーマである（山崎2006：42）。組織が一体となって、将来有望な教員を輩出するシス

テムを構築すること、すなわち、どのようなカリキュラムを構築していくかが重要なことであるのは、いうまでもない。

加えて、大学評価の視点から、教員それぞれの資質の向上、すなわちファカルティ・デベロップメントの重要性が注目され続けている。つまり、それぞれの科目を担当する教員が、どのような授業を学生に提供するかを、**学生の理解がより進むような授業方法を基礎**に考えることが、より重要なことではないだろうか。筆者は、今後も、受講生が将来教壇に立った際に「あの授業は役に立ったなあ」と思えるような授業が提供できる授業方法を、これからも探ってゆきたいと思う。

### 参考文献／参考URL

- ・池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹（2001）『成長するティップス先生ー授業デザインののための秘訣集』、玉川大学出版部。
- ・名古屋大学高等教育研究センター（2005）『「ティップス先生からの7つの提案」の開発』（特色GPシリーズ③）。
- ・福嶋智（2005）「教職課程カリキュラムの改善に関する事例研究（1）ー「特別活動論」におけるグループ学習ー」、『神奈川大学心理・教育研究論集』、35～41ページ。
- ・山崎準二（2006）「教員養成カリキュラム改革の課題」、教師教育学会編『岐路に立つ戦後教員養成』、日本教師教育学会年報、第15号、33～43ページ。
- ・中井俊樹（2008）「教授法の基礎」、名古屋大学高等教育研究センター『2008年度大学教員準備プログラム教材集』、23～32ページ。
- ・名古屋大学高等教育研究センター（2007）「ティップス先生からの7つの提案 教員ver.1.0」：  
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/faculty/index.html>（2008/11/17）

### （注）

- 1）『ティップス先生からの7つの提案』は、1980年代後半から米国高等教育学会（American Association for Higher Education）の研究グ

ループを中心に開発された『優れた授業実践のための7つの原則』(Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education, 以下『7原則』)の刊行をきっかけとして開発されたものである。『7原則』は、(1)7つの原則に関する概要、(2)教員向け冊子(Faculty Inventory)、(3)大学組織向け冊子(Institutional Inventory)、(4)学生向け冊子(Student Inventory)の4つの開発物から構成されている。1987年3月号の米国高等教育学会会報(AAHE Bulletin)に概要が発表され、1989年に教員向け冊子と大学組織向け冊子、1992年に学生向け冊子が発表されている。携帯に適した細部で、簡素な製本で十数ページにまとめられたこれらの冊子は、米国、英国、カナダで20万部以上配布され、全米の多くの大学において教員研修などで活用されている。(名古屋大学高等教育研究センター2005:3)

2) 中井(2008)32ページより引用のうえ、枝番を筆者加筆。